

< 今日の説教のポイント 使徒言行録 2:1-13、20:17-38 >

1 (2:1-13) 五旬祭の日に起こった聖霊降臨の出来事が持つ意味は？

五旬祭（新約聖書の原語のギリシア語ペンテコステの訳）の日に起こった不思議な現象に目を奪われるのではなく、それが持つ意味を考えなくてはなりません。「風」(2)と「霊」(4)、「舌」(3)と「言葉」(4)はそれぞれ同じ原語です。つまり、神様が御子イエス様によってなして下さった救いの出来事を、これからは神様が弟子たちに働かれ（聖霊を注がれ）、弟子たちがそれを語り伝える（舌を用い言葉で語る）時代に移る、ということが大事なのです。すなわち、ペンテコステ礼拝で大切なことは、教会（信仰者の群れ）の誕生と教会による伝道の始まりを覚えることなのです。聖霊を私たちが持てる物のように考えてはなりません。むしろ、神様ご自身が私たちに働いて下さることを考えればいいのです。そういつも思い、神様を信頼して生きていけばそれで十分なのです。三位一体の神とは、唯一の神様が、父なる神、子なる神、聖霊なる神として私たちの救いのために働いて下さることを言っているのです。

2 (20:17-38) 「聖霊が」を「神様が」と同意に使っているパウロ。

ですから、この日、信仰者の群れ（教会）が生まれ、彼らが世界中に出て行って、神様の福音（使徒言行録 5:42、8:4, 12 エヴァンゲリオン：良い知らせの意）を宣べ伝えて、さらに教会ができ、ついにこの日本にまで至ったのです。その最初期に神様が立てられて大きな働きをしたパウロが、彼が伝道してできたエフェソの教会の長老たちに語った告別説教の中で聖霊について何度か触れています。それを読むと、聖霊をどのように理解したらいいことを知らされます（使徒言行録 20:17-38 の中の 22, 23, 28）。パウロはここでも、「主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことさえできれば、この命をすら決して惜しいとは思いません」（24）と語り、キリストが十字架にかかられ死なれたこと、その死から復活されたことを福音と考えています。この出来事が神様の救いの確かさの根拠なのです！ そのことを私たちが理解でき、その上にしっかり立ち続けさせて下さるのも、唯一にして真なる神様なのです。「聖霊が」は、「聖霊なる神様が」あるいは「神様が聖霊によって臨んで下さる」と考えることが大事なのです。